

## 「西安交通大学サマースクール参加報告書」

京都大学 経済学部 3年 松尾義実

私は中国人と日本人のハーフであり、元々中国に対して大きな関心を持っていた。日本のメディアで語られて知る中国ではなく、自分の目で実際の中国の姿を見たいと思いこのプログラムに立候補したのだが、この度西安で過ごした10日間は、中国という国の雄大さと人々のあたたかさを私に教えてくれた。

日本で伝え聞いていた中国人にはどこか粗野で、日本人のことを嫌っているというイメージがあった。しかしいざ西安に来てみると、西安交通大学の先生や学生だけでなく、ふらりと立ち寄った小道で知り合った見ず知らずの方までもが私に親切な対応をしてくれる。また、バスに乗って移動していた際、お年寄りの団体が乗り込んだのを目撃するや座席に座っていた若者らがごく自然に座席を譲ったのを見て、内心とても驚いた。立っているお年寄りなど、ただの一人も見かけない。交通大学の学生にそれを訊ねてみると、彼は「あまりにも当然のことなのでいつも誰もが率先して席を立つんだ」と答えてくれた。私が普段愛用している阪急電車でも、老人に席を譲らず座り続ける人がたくさんいるのに、この人たちは常にこれを当たり前のように行っているのだ。私は、果たして日本のメディアはこうした中国の素晴らしい一面をきちんと伝えられているのだろうか、報道内容に偏見が含まれているのではないかと感じずにはいられなかった。

西安交通大学にも非常に驚かされた。中国の大学がどのようなものなのかこれまで全く知らず、日本とあまり変わらないだろうと思っていたが、キャンパスの中には銀行や何千人分の学生寮や巨大な食堂、果てはスーパーのようなものまでありその規模の大きさはとても日本とは比べ物にならないものであった。学生は1年中キャンパスから出ずとも生活できる。また、学生らは祝日であっても空いた教室で自習に励んでいた。これは平日でもあまり勉強をしてこなかった劣等生の私を悔い改めさせる、衝撃的な光景だった。

秦代の兵馬俑や華精池で観た長恨歌からは中国の偉大な歴史と文化を感じた。加えて他にも太極拳をはじめ、漢詩の学習など今回のサマープログラムには盛り沢山の文化・歴史体験イベントが含まれており、毎日が目新しいことばかりでそこから学んだことは非常に多い。

最後に、今回のプログラムでなによりも深く感動したのは、現地で色々としり身になって世話をしてくれた交通大学の仲間たちである。私の話す中国語はとても拙いものであったが、彼らは常に熱心に耳を傾けて実に楽しそうに会話してくれた。近い将来中国と何か深く関われる仕事に就き、またいつか彼らにこの恩を返しに行きたい。